論文

天正六年日向出兵再考
―キリスト教的理想国にまつわる諸問題―

植田　誠

はじめに

豊後大友氏の第二十一代当主大友宗麟（義鎮）。九州六か国の守護に任じられるなど、名実ともに豊後大友氏の最盛期を築いた。その治世は盤石に見えたが、思わぬところからほころびが生じた。きっかけとなったのが、天正六年（一五七八）の春と秋に行われた日向出兵である(1)。

その発端は、前年十二月に日向の伊東義祐が薩摩島津氏に敗れて豊後に亡命したことによる（大友氏と伊東氏は姻戚関係にあった）。伊東氏が軍事的敗北を喫したことに動揺した縣（延岡市）の国衆土持親成は、大友から島津へと従属先を変えた。明けて天正六年三月、義統（宗麟嫡男）率いる軍勢が土持討伐に向かい、翌月には土持氏の居城である松尾城を陥落させている（第一次日向出兵）。この時、複数の寺社が焼き討ちされている（破壊を含む）。

七月二十五日、宗麟は受洗してキリシタンになった。九月四日、大友軍は陸海両面から日向に向けて出兵した（第二次日向出兵）。宗麟は海路日向に向かい、務志賀（延岡市無鹿）に本陣を置いた。一方で田原親賢（紹忍）ら率いる四万とも五万ともいわれる主力部隊は、陸路日向に入り南進を続けて耳川を渡り、十月末頃までには島津方の高城（児湯郡木城町）を包囲するなど、優勢にことを進めた。しかし、十一月十二日の高城合戦で主力部隊が大敗を喫し、敗走途中に耳川でも甚大な被害を出した（高城・耳川合戦）。この報告を受けた宗麟ら務志賀の軍勢も、撤兵を余儀なくされたのである。

以上が日向出兵の概略である。大友氏凋落のきっかけになった出来事として、これまで多くの論者によって実態解明と歴史的位置付けがなされてきた。しかし、いまだ定見を得るに至っていない問題も多い。課題のひとつが、日向出兵の目的(要因)である。第一章で詳述するように、たんなる土持氏の討伐だけで片付く問題ではない。一体、宗麟ならびに義統は何を目的として日向に向かったのであろうか。本稿では、従来の研究の検証を行った上で、日向出兵の目的のひとつとされるキリスト教的理想国に関連する諸問題を検討することにしたい。

第一章．日向出兵の目的について

第一節．先行研究の整理

日向出兵は春と秋の二度行われている。先学が指摘するように、秋の第二次日向出兵は、遅くとも四月の時点ですでに決まっていたようである(2)。そうすると、二度の出兵を個々別々のものと捉えるのではなく、同一の目的（要因）で行われたと見るのが適切である。ここでは、二度の日向出兵を貫く目的について考えてみたい。これまで指摘されてきた主な説を確認しておこう。

①九州統一戦の一環
②伊東氏の旧領回復
③キリスト教的理想国の建国
④海外貿易の航路・要港確保
⑤境界紛争への対応

まず①について。これは、日向のみならず島津氏が支配する薩摩・大隅をも併呑して、九州を統一すなわち実効支配するというものである。『大友興廃記』や『日向記』などに見える説明であるが、本当にそこまでの意図があったかは疑問である。

②は、姻戚関係にある伊東氏が島津氏に奪われた領土回復を目指したというものである。この時点での大友・伊東の力関係を考えると、かりに旧領回復が叶ったとしても、はたして宗麟は元通り義祐に返還したであろうか。名目上義祐を日向に復帰させ、宗麟の統率下に組み込もうとした可能性が高いように思われる⑶。あるいは、義祐自ら「いかなる方法によっても日向の国主に復帰する望みがないので、せめてもの願いとして、自分と孫たちが生計を立てられるよう豊後で若干のものを与えられたい」と宗麟に申し出たというのが、真相かもしれない⑷。いずれにせよ、伊東氏の旧領回復のために侵攻するという大義名分は、出兵の正当性を主張する上で重要な意味を持つと考えられる。

①②のうち、宗麟を取り巻く状況から①を「ほとんど信ずるに足りない」と退け、②を「目的の一部をなすが、彼にはさらに大きな理想があった」とした上で、③キリスト教的理想国建国説を打ち出したのが、渡辺澄夫氏である⑸。その後、日向出兵の主たる目的としてこの説は広く受け入れられ、通説化するに至っている⑹。

①～③が主として大友方の史料とキリスト教宣教師が残した史料からの立論であるのに対して、『旧記雑録』を中心とした島津方の史料分析から導かれた説が④である⑺。海外貿易については大友・島津両氏が重視するところであり、航路・要港の確保は不可欠であった。大友氏にとって、貿易の重要拠点である油津・外之浦を要する飫肥が、姻戚関係にある伊東氏から島津氏に移ったことは看過できない問題であり、これを手中におさめる意図があった可能性は高い。④は、戦国大名をグローバルなアジア的規模の対外関係史のなかに位置付けようとする研究とも親和性が高い⑻。そうした研究動向も追い風になってか、近年とくに支持を集めている説のひとつといえよう⑼。

最後に⑤について。これは、一九九〇年代後半以降議論が進んだ戦国時代の合戦をめぐる研究とリンクしている。いわゆる国郡境目相論と呼ばれるもので、当該期の合戦の本質は、領土の境界領域をめぐる紛争であるという理解がなされるようになった⑽。日向出兵も国郡境目相論の一環であると強調するのが、八木直樹氏である。八木氏によると、「日向出兵は、日向伊東氏の滅亡により、大友領国と島津領国とが直接境界を接し、その中間地域にある日向国人たちの動向が不安定になったことにより引き起こされたものである。したがって、大友氏の日向出兵は、島津領国との境目地域にある「石城」と、秋の出兵の攻撃目標となった高城をめぐる典型的な戦国合戦であった」という⑾。大友氏と島津氏との間にあった伊東氏が没落したことによって境界領域が動揺し（その端的なあらわれが土持氏の動向）、干戈を交える結果を招いたことはたしかであろう。

以上、これまで提示されてきた出兵理由を振り返ってみた。ひとまず①は措くとしても、それ以外はいずれも相応の説得力を有している。重要なことは、日向出兵の目的をひとつに限定する必要はないということである。大事をなす場合、複数の理由が絡み合っていることは、十分にあり得る。事実、先行研究においても複合説を採る論者はすくなくない。たとえば、③を通説に至らしめた渡辺澄夫氏も、②を否定していない。その後の研究でも、「伊東氏旧領回復という名分、土持氏攻略を受けてのキリスト教的理想国家の建設、そして、海外航路の安全確保、それらが複合されて、日向国侵攻が決断されたのであろう」という複合説が呈されている⑿。

筆者も、①～⑤いずれかひとつに限って理解する必要はないと考える。このこと

を踏まえた上で、筆者なりにあらためて日向出兵の目的をまとめるならば、次のようになる。「伊東氏の没落によって境界領域が動揺したことにより、反旗を翻した土持氏を討伐する必要が生じた。豊後では反対意見が根強いキリスト教を征服地で存分に布教させ、キリスト教的理想国を樹立する好機である。その理想国には海外との窓口としての港も不可欠である。攻め入るにあたっては、旧領回復という大義名分で正当性をアピールすることも重要である」。このように、複数の理由は相互に矛盾することなく共存し得るのである。順序的には②が先行し、これに③④⑤が付随していったと考えられる（このうち本稿の主たる検討対象である③についていえば、土持氏の討伐に成功した四月頃から強く意識されるようになったと推定される。後掲【史料1】を参照）。

第二節．先行研究の検証　その一―鹿毛敏夫氏の所論をめぐって―

渡辺澄夫氏以降、日向出兵の目的（要因）として通説的位置にあるのがキリスト教的理想国建国説である。これ以外の理由にも目配りした上で複合的に理解する必要があるとはいえ、キリスト教的理想国建国が重要な目的のひとつであったことは疑えないと筆者は考える。しかるに、これに疑義を呈する潮流も無視し得ない。本節ならびに次説では、キリスト教的理想国建国説に疑義を呈する所論の妥当性を問うことにしたい。

まず取り上げたいのが、近年鹿毛敏夫氏が執筆された大友宗麟の伝記である(13)。これは、文献史料のみならず考古学の成果をふんだんに取り入れ、かつ氏が専門とされる対外交流史（アジア・ヨーロッパ各国との関係史）の知見を縦横に駆使したもので、従来の伝記とは一線を画す斬新さが目を引く。しかし、宗麟とキリスト教とのかかわり、とりわけ本稿が扱う日向出兵についての説明には疑問を感じる。たとえば次のような記述がある。「さらに、それ（筆者註：宣教師の史料や江戸時代の編纂物にしか登場しない「病弱」「好色」といった宗麟像）以上に深刻なのは、政権絶頂期にあった天正六（一五七八）年の高城・耳川合戦での大敗の主因を、「キリシタン大名」としての義鎮に結びつけて説明しようとする創作である」(14)。

後に見るように、高城・耳川合戦での大敗に帰結する日向出兵をキリスト教との連関で語るのは「創作」ではない。宣教師たちが書き記した史料に明記されている以上、これを無批判に「創作」と一刀両断することは、あまりにも乱暴な判断ではあるまいか。

鹿毛氏が強調するように、大友氏と島津氏の軍事衝突の理由のひとつとして、外交権・貿易利権をめぐる争いがあったことは事実であろう(15)。しかし、それはキリスト教的理想国建国説を覆すものでもなければ、矛盾するものでもないのである。

第三節．先行研究の検証 その二―橋本操六氏・八木直樹氏の所論をめぐって―

八木直樹氏は、宗麟が義統に家督を譲った後もなお領国統治に関与したいわゆる二頭政治の分析の一環として、日向出兵の再検討を行った(16)。現時点でもっとも新しく、かつ詳細な研究であり、今後日向出兵について考える上で大きな道標となることは間違いない。その検討結果については傾聴すべき点も多いが、より蓋然性の高い別の解釈が成り立つ余地があると筆者は考える。そこで、八木氏の検討結果を検証しながら、とくにキリスト教的理想国建国説について考えてみたい。なお、八木氏は先行する橋本操六氏の研究を援用しているので、橋本氏の所論もあわせて検証する(17)。まず、八木説の要点をまとめておこう。

ⅰ日向出兵の本質は島津領国との境目地域となった石城と、島津方の高城をめぐる争奪戦である＝典型的な境界紛争。

ⅱキリスト教的理想国建国の意図は春の第一次出兵はおろか、第二次出兵が決まった時点においても唱えられていなかった。日向での戦闘が優位に進むなかで、はじめて宗麟が口走ったに過ぎない。

ⅲよって、宗麟の日向出兵は、キリスト教的理想国の問題と切り離して考えるべき

である。

次に、八木説の論拠となる史料のうち主要なものを掲げ、八木説ならびに橋本説の妥当性を検証していきたい。

【史料1】

この日向の国は、そこを流れる耳川と呼ばれる大河によって二分されている。嫡子が戦場へ出発するに先立って、その河川から豊後の国境の間にあった十七の城は、豊後の嫡子の名と勢力を耳にしただけで降伏した。豊後との国境地帯には、やはり薩摩と同盟していたある殿がおり、その領地は土持と呼ばれたが、戦禍を受けて破壊され、その殿も戦死した。豊後の国主と嫡子は、そこにある僧院や神や仏の寺社を焼却し蹂躙するようにと命じ、事実そのように行なわれていった。

土持の領地とその土地柄に関する報告は、国主を大いに喜ばせた。彼はその年、あらためてそこに居住しようと決心し、息子に譲渡した他の諸国がより安泰であることを願い、自らは妻と土持で隠居することにした。そこで彼はカブラル師に次のように述べた。「予は日向に赴くことに決した。ついては同居するため豊後から三百名だけ家臣を伴うが、彼らはすべてキリシタンでなくてはならない。そしてそこに新たに築かれる都市は、従来の日本のものとは異なった新しい法律と制度によって統治されねばならず、日向の土地の者が予と予の家臣たちと馴染むためには、彼らは皆キリシタンになり、兄弟的な愛と一致のうちに生きねばならない。それがため、乗船するにあたっては、一司祭を同伴したい。さらに予が住む城を築く前に、まず教会を造り、イエズス会の数名がそこに住むことができるだけの封禄を与えるつもりである。その暁には予自身洗礼を受け、キリシタンとなった上は、デウスの教えに反することなきよう生きる覚悟である」と(18)。

渡辺氏以降、宗麟がキリスト教的理想国建国を目指したことを示す根拠のひとつとして取り上げられてきた史料である。具体的には、二重傍線部がそれに該当する。時系列を確認すると、第一次日向出兵が順調に進み、四月に土持氏の討伐が成功したという知らせを臼杵で受けた際のものである。この報告を受けた宗麟は日向に居住し、理想に叶う国造りに邁進する決意をしたことが読み取れる。橋本・八木両氏は、宗麟のこの発言が受洗前すなわち天正六年七月以前のものであることを強調しているが、そこでは次に掲げるカリオンの書簡との異同が大きなポイントになってくる。

【史料2】

それ故、彼ら二人は揃って、すっかり初めからカトリック教を学び始めたのです。また、彼はそれ以前に父と共に日向の国を攻め取ろうと計画を練っておりました。これには彼らにとって大義名分がありました。即ちその国をその国の真の所有者たる王のものに戻そうというのです。何故なら薩摩の王がこれを横領していたからであります。この王は、この地方において三つの王国の所有者となっております。さて父と子は共に謀って、この国が攻め落とせた場合には、これを老王の支配下にとどめることとしました。更にまた彼らは、老王自身が軍勢をひきいて日向にむかうこと、またその軍力は約四万人と決めました。一方若王はノチャ（野津）という別の場所に赴むき、彼地から戦いのために必要な物資を迅速に供給する手筈となりました。この時すでに父はキリスト教徒であり、息子は公教要理を受講する者でありました。それ故彼らはそれぞれ自己の観点から、その攻め入る国々に出来得る限り、キリスト教を広めようと努力する旨申し出たのであります。こうして老王は自らパードレ・フランチェスコ・カブラルやその他若干名のフラテルロ（神弟）をひき連れて日向へとむかいました。老王はパードレ・カブラルを強く愛し、その教えには従順であり、父とも師ともして慕い尊敬しております。前述しました国に攻め入るや、彼は忽ちのうちに敵を粉砕し、全くの短時日のうちにその国の大部分の支配者となりました。次に彼は城下に攻め入り、寺や神社に火をつけ、これを破壊致しました。

彼は何回となくパードレ・フランチェスコに向って語りました。この国に彼は是非とも立派なキリスト教国を打ちたてたい、またその名声がローマにまで届くような立派なキリスト教国をつくりたい、そしてキリスト教の教えに則って、この国が治められるのを見たい、と[19]。

宗麟父子が伊東氏の旧領回復を考えていたこと、それはあくまで大義名分で実質的には宗麟が支配するつもりであったこと、具体的な兵力数が書かれているなど興味深い史料である。波線部の記述から、【史料1】と同様に宗麟がキリスト教的理想国を目指していたことを示すものとして注目を集めてきた史料でもある。以下、【史料1】【史料2】を比較検討した橋本氏・八木氏の所論について、検証していきたい。

まず注目したいのが、宗麟がカブラルにキリスト教的理想国建国の構想を語ったタイミングである。【史料1】では、宗麟が構想を語ったのが自身の受洗前（より具体的には、第一次日向出兵で土持氏討伐が成功を収めた四月頃のこと）となっている。【史料2】傍線部に目を転じると、「この時すでに父はキリスト教徒」とあり、かつ出兵前のことであるから、七月二十五日から九月四日の間のことを指し示していることがわかる。その段階ではキリスト教の弘通に関連することのみが書かれている。その後、日向に攻め込んで一定の戦果をあげた段階で、キリスト教的理想国の構想を語ったという流れである（波線部）。

この違いに着目した橋本氏は、「出陣の当初の意図は日向移住とキリスト教の弘通であって、日向入国後の土持城下攻略、社寺の破却という異常な雰囲気の中で、興奮気味の宗麟が「理想的キリスト教国」構想を口走ったものと考えられる。フロイスは、その発言をあたかも受洗前から宗麟が持っていた構想であるかのように叙述したと考えるべきであろう（傍点筆者）」とまとめる。

八木氏は橋本氏の見解に賛意を示した上で、「「キリスト教的理想国」の問題を切り離して考えた場合、境目地域の城を争奪する典型的な境界紛争以外の何物でもない」と結論付けた。つまり、キリスト教的理想国の構想は春の段階はおろか受洗した七月時点でも存在せず、第二次日向出兵の快進撃のなかではじめて語られたというわけである。換言すれば、キリスト教的理想国の構想は、宗麟が境界紛争の前線に身を置き、寺社焼き討ちが繰り広げられる興奮状態の中で偶発的に出てきたものに過ぎない、というのが橋本・八木両氏の主張である。しかし、この解釈には承服しがたい点がある。

①史料選択の妥当性

ある歴史事象について記した史料が複数存在し、内容的に齟齬がある場合、より蓋然性が高いと判断される史料を選択することが求められる。もしくは、双方を整合的に解釈する必要がある。取捨選択する場合、何らかの選択理由が表明されてしかるべきである。橋本・八木両氏の場合は【史料2】が選択されたわけであるが、その理由が示されていない。加えて【史料1】はフロイスが事実を曲げて書いたという見立てであるが（橋本氏引用文傍点部）、その根拠は示されていない。

フロイスは日向出兵の前年一月に豊後を訪れ、まもなく臼杵に来て以来宗麟の近くにいた人物である[20]。その記すところには、一定の信頼性を認めてよいはずである。筆者としては、【史料1】【史料2】を取捨選択するのではなく、むしろ相互補完的に理解するべきと考える。それは、次の理由による。

②キリスト教弘通とキリスト教的理想国建国の関係性

キリスト教弘通とキリスト教的理想国建国は、どのような関係性として把握するべきか。橋本・八木両氏は、両者を別物として理解している。もう一度【史料1】の関連部分を見てみよう。「新たに築かれる都市は、従来の日本のものとは異なった新しい法律と制度によって統治されねばならず、日向の土地の者が予と予の家臣たちと馴染むためには、彼らは皆キリシタンになり、兄弟的な愛と一致のうちに生きねばならない」とある。このうち二重傍線部がキリスト教的理想国の構想、波線部がキリスト教弘通となる。これは文脈上、両者が個々別々のものではなく、一体の

ものとして認識されていたと読むべきである。つまり、法や制度といった新しいシステムを作るだけでは不十分であり、現地の人々をキリシタンに改宗させなければならない（そのため弘通が必要）という理路である。

一方【史料２】は、宗麟の出兵以前ではキリスト教弘通が示されているのみである（傍線部）。しかし、右に示した私見のように、キリスト教弘通とキリスト教的理想国建国が一体のものであるという認識が存在したとすれば、【史料２】傍線部ではキリスト教的理想国のくだりは、たんに省略されただけではないだろうか。次章で述べるように、キリスト教的理想国建国は、一方的な破壊の上に計画されたわけではない。領民への弘通が必須と考えられていたのである。その意味で、この場合のキリスト教弘通は理想国建国と地続きになっているわけであり、文章中で片方を省略しても（すくなくとも関係者には）通用すると考えられたのではないだろうか。このように理解すれば、【史料２】傍線部は【史料１】の内容（二重傍線部＋波線部）と合致する。橋本氏のように特段の根拠もなく、【史料１】をフロイスが事実を曲げて書いたと解釈する必要もなくなってこよう。

以上、【史料１】【史料２】を相互補完的に読み解いてみた。まとめると、キリスト教弘通とキリスト教的理想国建国は一体のものであり、宗麟自らが出兵する以前（第一次日向出兵で土持氏の討伐に成功した四月頃）から意識するようになったものと考えられる。

③キリスト教的理想国の構想は複数回語られていた

橋本・八木両氏ともに、宗麟がキリスト教的理想国の構想を宣教師に語ったのは一度きりという前提で論を展開している。しかし、かならずしもそう考える必要はない。

【史料２】波線部「彼は何回となくパードレ・フランチェスコに向って語りました」の部分から、キリスト教的理想国建国の話は一度限りの宣言ではなく、繰り返し宗麟からカブラルに語られていたことがわかる。もちろん、何度も語ったのはすべて宗麟が日向に赴いて以降のこととみなすことも可能ではあるが、【史料１】あるいは次に見る同年九月三十日付のフロイス書簡とあわせて考えるならば、これも宗麟が出兵する以前の段階、すなわち春の第一次日向出兵で幸先のよい成果が報告された段階にまでさかのぼると見て不自然ではない。つまり、宗麟は臼杵や日向で複数回キリスト教的理想国の構想を語っていた可能性が想定されるのである。

④他史料との整合性

ここまで橋本・八木両氏が主たる論拠とされた二点の史料に着目して検討してきたが、これ以外の史料との関連はどうか。【史料２】二重傍線部にあるように、九月に日向に入った宗麟率いる軍勢は大がかりな寺社焼き討ち（破壊を含む）を行っている。しかし、日向での寺社焼き討ちはこれがはじめてではない。というのも、宗麟自らが出陣する以前の段階、すなわち義統による第一次日向出兵の戦後処理の段階で、宗麟・義統の命令を受けて実行されていたのである。そのことは【史料１】傍線部から判明するが、これに照応するより詳しい記述として、「一五七八年九月三十日付フロイス書簡」がある。そこから、ジアン（ジャン）というキリシタン武将らに土持氏討伐後の軍事処理とともに、寺社焼き討ちを命じていたことがわかる（後掲【史料３】【史料４】）。こうした計画的作戦が指示されていたこと自体、キリスト教的理想国建国が早い段階で念頭にあった証左となろう。

いよいよ宗麟が海路日向に向けて出立する際には、船に旗が掲げられた。それには赤い十字架を描き白緞子の金の縁飾りを施すなど、キリスト教を意識していたことは間違いない。さらに重要なのは、日向に向かった面々のなかには、受洗間もない夫人（ジュリア）をはじめ家族や、カブラル・トルレス・アルメイダらを伴っていたことである[21]。宣教師はともかく夫人まで帯同していたとすれば、たんなるキリスト教の弘通や境界紛争という解釈では説明がつかないであろう。

以上、橋本・八木両氏の見解を検証してきた。①～④の理由から、キリスト教的理想国建国は、秋の第二次日向出兵において戦場の宗麟がはじめて口走ったに過ぎ

ない、という見立ては成り立たない。すくなくとも、第一次日向出兵が順調に進んだ四月頃から、征服予定地にキリスト教的理想国を打ち立てる構想が練られ、語られはじめたものと考えられる。八木氏のようにキリスト教的理想国の問題を切り離し、境界紛争とみなすだけでは、日向出兵の本質が見えてこないのである(22)。

第一節で整理したように、日向出兵は複数の理由によって行われたと見るべきである。ここでは、キリスト教的理想国建国も、その重要な理由のひとつとみなすべきことを、再度強調しておきたい。

第二章．キリスト教的理想国建国に向けて

第一節．ジアンによる寺社焼き討ちと宣教

本章では、キリスト教的理想国建国に関連する事柄のうち、重要かつ筆者がこれまで行ってきた研究に連なる問題について論じる。キリスト教的理想国建国のためには、仏教・神祇などキリスト教伝来以前から人々に信仰されてきた宗教（在来宗教）を排除する必要があった。そのため寺社焼き討ち（破壊を含む）が行われた。ここではその実態と、これに関与した人々の心性にも踏み込んでみたい。注目すべきは、先に触れた「一五七八年九月三十日付フロイス書簡」である。やや長文になるが、該当箇所を【史料3】【史料4】に分けて引用する。

【史料3】

豊後の国主（大友宗麟）は自ら軍勢を率いて日向を攻める前に、三名の武将を当地より遣わし、彼に降伏した十七の城を占領するとともに軍事を処理しようとした。二人（の武将）は異教徒で、ジアンのみはキリシタンであったが、彼の智慮と徳、生来の才能とにより国主と嫡子（義統）はこの一件をとりわけ彼に託していた。かの国に到着するとジアンは職務の暇を見出したので、ただちに己れの才能に磨きをかけ、同地の貴人や庶民にいとも有力な道理をもって説教をしたところ、多くの人が洗礼を授けるよう求めた。彼は、やがて司祭が同地に来るのであり、順序正しくカテキズモをすべて聴き、真理をすっかり悟った後であれば洗礼を受けるに足る身になっていようと言って断わった。その他の異教徒らが驚いたことのひとつは、デウスのことについて様々な時に質問をすると、彼がその時々に新たな道理をもって答えて人々を完全に満足させたことである。

かの日向国の人々は生来、偶像をはなはだ大切にし、これを崇めることにたいそう熱心であるので、小さな町にも数多くの僧院や多額の寄進を集める殿堂がある。ジアンは国主と嫡子よりそれらを焼いて完全に破壊せよとの命を受けていたが、ジアンはこれを大いに喜び、さっそく実行に移し、多額の費用をもって立派に建てられた神、仏の殿堂を多数焼き払った。殊に同地には最も有名な寺院が二つあり、各国から巡拝者が集まる。その一つは横岳の薬師（J.yocodaque no yacuxi）と称し、兵士らはこれを崇拝するのみならず、同寺院はしばしば明らかな罰を下すことがあると言われているのでこれを恐れてもいる。堂内には多数の兵士がいて供物を捧げ、仏の前に（供えて）ある供物を飲んでいたが、ジアンは急ぎ先に進まねばならなかったので、悪魔がいとも崇められている殿堂を破壊せずに通過することが心苦しく思われた。そこで彼は（寺院の）裏へ回り、礼拝堂の背面に火をかけるとたちまち激しく燃え始めた(23)。

冒頭部分の記述から、宗麟が兵を率いて日向に向かう九月以前に、三名の武将が日向に派遣されていたことが判明する。「十七の城を占領するとともに軍事を処理しようとした」とあるのは土持氏を討伐した後の戦後処理を指す。土持氏が降伏したのは四月のことなので、三名の武将が派遣されたのは四月か五月頃のことと推定される(24)。規模人数は不明ながら、三名とも相応の兵を率いていたことは疑いない（後掲【史料4】の「同行した他の武士ら」が該当する）。

派遣された三名のうち、ひとりはジアン（ジャン）というキリシタンであった。彼には戦後処理以外にも重要な任務があった。それは寺社の焼き討ちであり、忠実にこれを実行した（二重傍線部）。具体的には、横岳の薬師が焼き討ちにあったことが記されている[25]。

とはいえ、ジアンがただの破壊者ではなかった点にも留意する必要がある。傍線部にあるように、並行して宣教活動も行っていたのである。興味深いのは、受洗希望者に対して「やがて司祭が同地に来る」と諭している点である（現に九月の第二次日向出兵ではカブラル司祭らが帯同することとなる）。こうしてみると、ジアンによる焼き討ちと宣教という二面作戦は、宗麟や宣教師たちが入部してキリスト教的理想国建国に取り掛かる前の、いわば地ならしと位置付けることができる。ジアンの活動をさらに追ってみよう。

【史料4】

同国の三分の一を割いて（流れる）大河を渡るとそこはすでに敵地であったが、三名の武将は立磐の大明神と称する寝殿に到着した。ここは日本の神々の源であるため前述のものよりいっそう尊敬されている。（武将らが率いる）全軍の内、キリシタンはジアン一人の外になく、異教徒の武将二人と同行した他の武士らは皆神殿の前で馬から降りて各自矢を神に捧げ、また或る者は勝利を授かるため願文を紙に記して捧げたが、これは恭しく行なわれた。（中略）その後、（筆者註：ジアンが）同僚の武将二人には、かの神殿を焼かずにここを通過することはできないと言った。他の者（二人）は神を崇敬しているので、豊後国主と嫡子は国の誉れと美のために、そのような壮麗なものを大いに喜ぶであろうし、国主と嫡子がこの地に野営する時、かの神殿は彼らが宿泊するうえで十分なる品格を備えるものであると言った。ジアンはこれに答えて、彼らの言う第一の点については、その通り、国主と嫡子は神殿が国の飾りとなることを喜ぶであろうが、国主と嫡子が神、仏の殿堂をすべて破壊することを命じた時、かの神殿も他のいかなる場所も除外しなかったのであり、また、第二点については、かの神殿が戦時に国主の居所となりうることよりも、敵方が自領内にあるためにこれを利用することのほうが有りうる、と言ってただちに火をかけさせた。同国の他の地域から来た者がおよそ百名いたが、彼らの大いに崇める神殿が燃えるのを見ると、地に伏して数珠を手で揉み始め、彼らから離れてゆく神に別れを告げ、このような大罪を働いた者に罰を与えることを請うた。

これも「一五七八年九月三十日付フロイス書簡」の一節である。冒頭部分の記述から、ジアン一行がさらに南進して「同国の三分の一を割いて（流れる）大河」、すなわち耳川を渡河していたことがわかる。それは敵対する島津領内に足を踏み入れたことを意味する[26]。九月の第二次日向出兵で、田原親賢らを指揮官とする大友軍が耳川を渡りはじめたのは同月二十五日以降のことであるが[27]、ジアンらはこれに先立って敵の領内に侵出していたのである。

耳川を渡ったジアンは、当地で尊崇されていた立磐の大明神を焼き討ちした。立磐の大明神は、日向市美々津町の立磐神社のことである[28]。横岳の薬師や立磐の大明神といった現地の重要な信仰対象を焼き討ちした理由については、神田千里氏が指摘するように「日向住民に対する公然たる信仰表明」とみなしてよいだろう[29]。

本拠地豊後国内でのキリスト教的理想国建国は、家臣らの反対必至で到底実現不可能であった。それゆえ、征服地において隠居という比較的自由な立場からこれを実現しようとしたのであろう[30]。そのための地ならしとして、ジアンらによる焼き討ちと宣教がなされたのである[31]。

第二節　神罰仏罰の恐怖のなかで

前節では、日向国内における寺社焼き討ちについて確認した。最初にジアンがこれを行った後、第二次日向出兵においても同様の光景が見られた。それは、ジアン

による焼き討ち後に再建された寺社が中心であったという(32)。短期間に再建を果たすには限界があろうことから、日向における焼き討ちはジアンの活動によるものが大きかったと考えられる。

揚言するまでもないが、寺社は信仰対象を祀る宗教施設であり、聖性を有する聖域である。それを焼き討ちするには、相応の覚悟が必要であったに相違ない。その理由は、罪業意識や神罰仏罰の恐怖・後ろめたさといった心的葛藤がつきまとうからであり、中世を通じてこれに対する種々の対処法（方便）が形成され、流布していたほどである(33)。本節では、こうした心性に目を向けるなかから、寺社焼き討ちの実態をさらに探ってみよう。

まず、【史料4】傍線部には、ふたりの武将が焼き討ちを思いとどまらせようとジアンを説得する様子が書かれている。いかに敵方に属するとはいえ、神仏の坐す聖域を焼くことに心的葛藤を感じるのは、素直な感情であろう。彼らを躊躇させたのは、それが信仰の対象であることはもちろんであるが、波線部からより具体的な理由を読み取ることができる。つまり「立磐の大明神」を焼くことは大罪であり、禁を犯した者には大明神が神罰を下すという認識があったのである。神仏はときに罰を下す存在であるという認識は当時一般的であり、【史料3】波線部からも読み取ることができる。ここではもうひとつ、神罰の事例として直接日向出兵時の事例ではないものの、これに参加した田原親賢（紹忍）にまつわるエピソードを見てみよう。

奈多八幡宮大宮司家に生まれた親賢は、武蔵田原氏に養子入りして田原家の家督を継いだ人物である。実妹（実姉とも）が宗麟の正室になったことから、大友家中でも大きな力を誇った。日向出兵において、主力部隊の総指揮を執ったのも親賢である(34)。

ここで紹介するのは、親賢が宇佐宮を攻撃した時のものである。永禄四年（一五六一）、親賢らは軍勢を率いて宇佐大宮司の館を破却した。そのことは、「去月十五日當大宮司到津方宅所破却候、誠慮外不思儀之至候、為社奉行者、社頭繁栄氏人安全載（マヽ）判、且者公儀御祈祷、且者當社先例候処、至御神邊差向軍勢、大宮司館内令打破人取狼藉之儀、於當社前代未聞此事候」と史料中に見える(35)。大友方の社奉行という立場にあった奈多鑑基（親賢実父）が、宇佐宮領押領・諸役賦課を行ったことによって生じた両者の対立が嵩じた結果であった(36)。

親賢の攻撃によって大友氏への憎悪を強めた宇佐宮では「於是宮司神官及僧巫女、悉會八幡大神社頭、大呪詛大友」という(37)。一方『両豊記』には、大宮司の館に放った火が延焼して社殿を焼いたとある。その時にわかに発生した暴風雨が田原軍の陣屋を破壊したので、恐れをなした兵たちは退却を余儀なくされた。こうした光景を目の当たりにした神官社僧たちは「世澆濁に及ぶといへども、神力はかはらざりけり」と喜び臨時の祭礼を催したという(38)。一見奇想天外な話であり、とりわけ『両豊記』は荒唐無稽な展開であるが、たんなるフィクションと切って捨ててよいものだろうか。中世において、寺社を焼いた者が神罰仏罰を蒙るという話が数多く存在することを想起するならば(39)、右史料も神罰仏罰を恐れる中世人の心性が反映されていると見てよい。

以上、ジアンの同僚の武将ならびに田原親賢の事例を通じて、当該期における寺社を焼くことに対する心的葛藤（神罰仏罰の恐怖）を確認した。

第三節　キリシタンに寄せられた期待

先述のように、ジアンは土持氏討伐の戦後処理と、キリスト教的理想国建国の地ならしという特命を帯びて日向に赴いた。ジアンのような宣教もできるキリシタン武将に指令がくだされたのは、当然かもしれない。しかし、はたして理由はそれだけであろうか。前節で見たように、寺社焼き討ちは罪業意識や神罰仏罰の恐怖・後ろめたさをともなう行為であった。そのように考えると、キリシタンが在来宗教の影響下から一応抜け出た存在＝神罰仏罰の恐怖などから免れた存在であったことも、ジアンが起用された大きな理由ではないだろうか。もちろん、寺社焼き討ちは、戦

国時代を含む中世を通じて繰り返されてきた。それを実行した者たちは、ほぼ例外なく在来宗教の影響下にあった。そのため、できることならばやりたくない（自分の手を汚したくない）というのが普通の感覚であった。命じる側としても、躊躇が生じたはずである(40)。

やや時代は下るが、こうした心性に関連する興味深い事例がある。慶長十四年（一六〇九）、「神に捧げられている島」すなわち玄界灘に浮かぶ沖ノ島の神社に、多くの財宝があるという話が筑前を統治する黒田長政の耳に入った。すぐさま家臣を沖ノ島に派遣しようとしたが、不敬を働けば神罰を蒙ると信じられていたため誰も行きたがらない。「キリシタンは神を恐れぬという噂は本当であろうか」と考えた長政は、籠手田ゼロニモというキリシタン武将を呼び、沖ノ島に向かわせた。仲間を連れ立って沖ノ島に渡ったゼロニモは、財宝を奪った挙句に神殿を破壊して帰還したという(41)。

在来宗教の影響下にあった者たちが神罰を非常に恐れていたこと、対照的にキリシタンはその軛から免れていたことがよく読み取れる。長政にしても、家臣たちに無理を強いるのは気が引けたため、ゼロニモに沖ノ島行きを命じたのである。これは、日向出兵時にジアンに寄せられた期待と同一のものであろう。

ここまで、キリシタン＝在来宗教の影響力から免れた存在ということを所与の前提に議論を進めてきた。しかし、この前提がすべてのキリシタンに当てはまるかどうかは、また別問題である。一口にキリシタンといっても、その信仰態度には大きな違いがあったと考えられるからである。そこで、やや大雑把な括りではあるが、当該期キリシタンの実態把握のため便宜上次のふたつに大別して考察してみよう。

①排他的キリシタン

キリスト教に専心した、原理主義的立場のキリシタンを指す。日本の在来宗教ならびにそれに基づくさまざまな神仏は無用であるばかりか、積極的にこれを唾棄すべしという発想に至ったのである。本稿の登場人物でいえばジアンや籠手田ゼロニモ、あるいは後に見るリンセイ（リアン）がその典型といってよい。

受洗後の宗麟も、キリスト教への傾倒が顕著になっていく。受洗から二カ月ほど後に開始された第二次日向出兵におけるキリスト教的理想国建国については本稿で見てきたが、その失敗後も各所においてキリシタンの保護と領内の改宗運動を行っている(42)。すでに受洗の時点で家督を義統に譲っていたため、比較的自由な立場で振る舞うことができたと考えられる。逆に、在来宗教・神仏に対する信仰の痕跡は次第に見えなくなり、こうした存在と袂を分かつかのような行動が目立つようになる(43)。隠居地とした津久見でも寺院を焼いて仏像を破壊した後、キリスト教を中心に据えた町造りに邁進した宗麟はここで生涯を閉じた(44)。こうした信仰態度を見る限り、宗麟も排他的キリシタンの範疇に加えることができるであろう。

②融和的キリシタン

①と異なり、従来の信仰対象と決別できない（しない）者も多かった。これを在来宗教に融和的な態度を取ったという意味で、融和的キリシタンと呼ぶことにしたい。中世社会において、複数の信仰対象を保持する兼宗的態度が一般的であった。②は、そうした中世の伝統的な信仰態度の同一線上に位置付けられる。キリスト教についても、救いを与えてくれる新しい信仰対象がひとつ増えたという認識であろう。

日向出兵と同じ頃から、豊後国野津院のキリシタン繁栄の先駆けとなるリンセイ（リアン）の活動が史料上に現れる。彼は洗礼を受ける以前から、それまでの信仰対象と決別するため地元の寺社を焼き、仏像の首を刎ねるなどの活動を行っていた。その意味で、彼も①に分類することができる。ところで、リンセイには妻がいた。彼女もリンセイと同様従来の信仰対象と決別したはずであったが、とくに信仰対象としていた仏像を複数隠し持っていた(45)。類例として、肥前有馬領の老キリシタンも、「仏僧の呪術やしきたりを行なってなかなか神仏を拝むことをやめなかった」という(46)。

その後、リンセイの妻は仏像を隠し持っていることが露見し、リンセイに咎められすべて焼却させられている。有馬領の老キリシタンは、司祭からあらためて説教を受け、神仏と決別している。このように、②は①から不十分な信仰態度とみなされ、しばしば糾弾されている。キリシタン集団の内実は、こうした信仰態度に起因する矛盾を内包していたといえよう(47)。一方で支配階層に属する者であっても、受洗後に禅宗・八幡・天神といった諸信仰を保持したシメオンこと黒田孝高のように(48)、②に分類される者はすくなくなかったと思われる。

では、こうした区分と寺社焼き討ちとはどのように関係してくるであろうか。②においては在来宗教の影響力が多分に残っていることから、いざ焼き討ちを行うとなると心的葛藤が生じる可能性があったと推察される。だからこそ、在来宗教との相克の場においては、ジアンなど①の立場のキリシタンが重宝されたといえよう。このことは、宗教の影響力が低下する画期という評価がなされることも多い戦国時代においても、宗教・神仏の力が依然として人々の心を覆っていた証左でもある。宗麟の目指したキリスト教的理想国についても、当該期がなお宗教の影響力が強かった時代という前提に立っての議論が求められる(49)。

おわりに

最後に、本稿の趣旨をまとめて擱筆したい。

（一）天正六年の豊後大友氏による日向出兵は、複数の目的（要因）が絡み合って行われた。伊東氏の旧領回復、海外貿易の航路・要港確保、境界紛争への対応、そしてキリスト教的理想国の建国などである。このうち、キリスト教的理想国建国説を否定する見解もあるが、むしろ日向出兵の重要な理由のひとつとして積極的に位置付けるべきである。

（二）キリスト教的理想国建国のためには、仏教をはじめとする在来宗教を排除する必要があった。そのため、宗麟が拠点を置いた務志賀を中心に各地で寺社焼き討ち（破壊を含む）が繰り広げられた。こうした行為は、在来宗教を信じる者たちに罪業意識や神罰仏罰の恐怖・後ろめたさを生じさせるものであった。

一方、キリシタンのなかには在来宗教と完全に決別できなかった者もいたが（融和的キリシタン）、キリスト教に専心した原理主義的立場の者もいた（排他的キリシタン）。このうち後者は、在来宗教そのものを否定していたため、神罰仏罰の恐怖からも一応免れていた。日向出兵に際して、排他的キリシタンであるジアンが宗麟や宣教師に先立って派遣されたのも、神罰仏罰の恐怖から免れていたことが一因であり、キリスト教的理想国建国の地ならしとして、破壊と宣教を行ったのである。

キリスト教的理想国については、当該期がなお宗教の影響力が強かった時代という前提に立った上での議論も重要である。

［註］

（１）日向出兵の経緯については以下の文献に詳しい。『大分県史中世篇』Ⅲ（大分県、一九八七年）第三章第三節（渡辺澄夫氏執筆）、『宮崎県史通史編』中世（宮崎県、一九九八年）第五章第二節（長田弘通氏執筆）、八木直樹「二頭政治期における義統と宗麟の関係」（同『戦国大名大友氏の権力構造』戎光祥出版、二〇二一年）、木城町教育委員会編『高城合戦』（鉱脈社、二〇二二年）など。

（２）橋本操六「大友氏の日向侵攻とその目的」（『大分県地方史』一二八、一九八七年）、同右八木論文など。

（３）新しいところでは、黒嶋敏氏が「伊東氏を日向に復活させつつ、みずからの統率のもとに置く目的で、大友氏は一五七八年の春から侵攻を開始したので

ある」と述べている。黒嶋敏『戦国の〈大敗〉古戦場を歩く』（山川出版社、二〇二二年）。ただし、黒嶋氏はキリスト教的理想国建国説も是認する。このように、複数の説を採る論者は黒嶋氏に限ったものではなく、むしろ多数派といってよいだろう。これについては後述する。

（４）『日本史』第二部五章。『日本史』の引用はすべて『完訳フロイス日本史』７（中公文庫）による。

（５）渡辺澄夫「大友宗麟とキリスト教的理想国」（同『増訂豊後大友氏の研究』第一法規出版、一九八二年、初出一九八〇年）。この論文は、宗麟の日向出兵最大の理由として、はじめてキリスト教的理想国建国を詳細に論じた研究として重要であるが、これに先行して書かれた同『大分県の歴史』（山川出版社、一九七一年）などにおいてもすでに示されている。

（６）支持する論者は枚挙にいとまがないので、これを主因とみなす近年の論著の一例を挙げておきたい。豊田寛三ほか『大分県の歴史』（山川出版社、一九九七年）４章（飯沼賢司氏執筆）、山本浩樹『西国の戦国合戦（戦争の日本史12）』（吉川弘文館、二〇〇七年）、大津祐司「大友宗麟・義統」（五野井隆史監修『キリシタン大名』宮帯出版社、二〇一七年）、池享『毛利領国の拡大と尼子・大友氏（列島の戦国史６）』（吉川弘文館、二〇二〇年）、福島金治『九州・琉球の戦国史』（ミネルヴァ書房、二〇二三年）など。

（７）木村忠夫「耳川合戦と大友政権」（木村編『九州大名の研究（戦国大名論集７）』吉川弘文館、一九八三年、初出一九七二年）、前掲註（２）橋本論文。

（８）鹿毛敏夫『アジアン戦国大名大友氏の研究』（吉川弘文館、二〇一一年）、同『アジアのなかの戦国大名』（吉川弘文館、二〇一五年）など。

（９）新名一仁『島津四兄弟の九州統一戦』（星海社新書、二〇一七年）、岡寺良『九州戦国城郭史』（吉川弘文館、二〇二一年）など。

（10）山本浩樹「戦国期戦争試論」（『歴史評論』五七二、一九九七年）、則竹雄一『戦国大名領国の権力構造』（吉川弘文館、二〇〇五年）、稲葉継陽『日本近世社会形成史論』（校倉書房、二〇〇九年）など。

（11）八木直樹「戦国大名大友氏の軍事編成と合戦」（鹿毛敏夫編『大内と大友』勉誠出版、二〇一三年）。この後、八木氏はより詳細な日向出兵についての研究成果を公にしている。重要な意味を持つと考えられるので、後に検証を加えたい。

（12）前掲註（１）『宮崎県史通史編』中世。

（13）鹿毛敏夫『大友義鎮』（ミネルヴァ書房、二〇二一年）。

（14）同右鹿毛著書二五〇頁。

（15）同右鹿毛著書二八〇・二八六・二八七頁など。

（16）前掲註（１）八木論文。本節における八木氏の所論はとくに断らない限りすべてこれによる。ここで展開された内容については、八木直樹「大友宗麟・義統」（新名一仁編『戦国武将列伝11』九州編、戎光祥出版、二〇二三年）などで簡潔にまとめられている。

（17）前掲註（２）橋本論文。

（18）『日本史』第二部二章。なお、八木氏は【史料１】の基となった「一五七八年十月十六日付フロイス書簡」も挙げているが、内容的に【史料１】とほぼ変わるところがないので、ここでは省略する。

（19）「一五七九年カリオン年次書簡」。引用は『大分県史料』14（大分県史料刊行会）による。

（20）五野井隆史『ルイス・フロイス』（吉川弘文館、二〇二〇年）。

（21）『日本史』第二部五章、「一五七八年十月十六日付フロイス書簡」。

（22）八木氏は、実権を義統に譲って隠居したばかりの宗麟がわざわざ出陣した行動を不可解と述べる。前掲註（11）八木論文。

しかし、キリスト教的理想国建国という理由を除外しなければ、疑問は氷

解するのではあるまいか。しかもそれは、八木氏が強調する境界紛争説とも矛盾することはないのである。さらに八木氏は同論文中において「戦国大名大友氏では当主自らの出陣は極めて異例」であり、日向出兵は数すくないひとつであると述べている。他大名との差異を念頭においた、重要な指摘であろう。「極めて異例」な出陣がなされた背景には、相応の理由があったはずである。その理由こそが、宗麟を欠いてはあり得ないキリスト教的理想国建国ではあるまいか。

（23）「一五七八年九月三十日付フロイス書簡」。引用は『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第5巻（同朋舎出版）による。

（24）『日本史』第二部五章には「過ぐる夏、嫡子は降伏した敵の多くの城を占領させるために一人のキリシタンの隊長を派遣」したとある。

（25）横岳の薬師について根井浄氏は、yocodaque を hocodaque ＝ホコダケの誤りと見立てた上で、日向市細島（かつては鉾島と呼ばれていた）の「米山」に祀られていたと思われる薬師仏（堂）に該当するという仮説を提示している。根井浄『修験道とキリシタン』（東京堂出版、一九八八年）一六一〜一六三頁。

（26）『日本史』第二部二章に「日向の国は、そこを流れる耳川と呼ばれる大河によって二分されている」とある。さらに同第二部五章には「日向国の中の征服地と非征服地を分つ耳川」とある。

（27）「大友御合戦御日帳写」。引用は『鹿児島県史料旧記雑録後編』1（鹿児島県）、一〇三九号による。

（28）前掲註（25）根井著書一六三頁。

（29）神田千里「大友宗麟の改宗」（『東洋大学文学部紀要史学科篇』四十、二〇一四年）。

（30）前掲註（5）渡辺論文、同右神田論文参照。

（31）ただし、すべての寺社が焼かれたわけではない。建物を破壊してその材木を教会建設の資材として再利用するケースもあった。これについては註（40）で簡潔に触れるほか、あらためて別稿を用意したい。

（32）『日本史』第二部五章。

（33）拙著『中世の寺社焼き討ちと神仏冒涜』（戎光祥出版、二〇二一年）、同『寺社焼き討ち』（戎光祥選書ソレイユ、二〇二二年）。

（34）「デウスの教えならびにキリシタンの布教事業に対して極度の憎悪を抱いている」（『日本史』第一部一一三章）と指弾されているように、親賢はキリスト教嫌いとして有名であった。はたして彼は、キリスト教的理想国についてどう考えていたのであろうか。このことを直接証明するのは困難であるが、すくなくとも親賢が積極的にキリスト教的理想国建国そのものに異議を唱えたという確証はない（かりにそうした態度をとったのであれば、フロイスあたりが盛んに書き立てたであろう）。宗麟に重用されて主力軍の中核を担った以上、宗麟の意図と乖離した態度をとったと見るのも不自然である。本意ではなかったにせよ、親賢がこれを容認した可能性を想定してよいのではあるまいか。しかしそう考えた場合、ただちに疑問が生じる。なぜキリスト教を忌み嫌う親賢が、キリスト教的理想国建国を容認したのか。

　この疑問については、次のように考えたい。日向出兵の前年、養子の親虎が反対を押し切ってキリシタンになると、親賢は激昂して信仰を捨てるように命じている。親賢はカブラルにも働きかけ、もし親虎の件が上手くいった暁には「豊前、筑前、および予が権限を有する諸国に多数の教会を建てさせるであろう」と語ったという（『日本史』第一部一一三章）。本気で教会建設を後押しする気持ちがあったのかは疑わしいが、ここでは豊後以外で布教が展開することについては難色を示していない点を読み取りたい。あるいは日向出兵の失敗によりキリスト教に対する非難が強まってきた際にも、親賢を

はじめ反キリシタンの立場に立つ者はキリシタンを「少なくとも豊後の国外へ追放すること」（『日本史』第二部十三章）を目指したことも、同様である。つまり、親賢は大友氏の支配領国全体というよりも、あくまで本拠地豊後国内におけるキリスト教の伸長を警戒したのである。そう考えた場合、日向にキリスト教的理想国が打ち立てられることは、むしろ好都合ではなかったか。なぜなら、豊後国内のキリシタンの目が日向に向くからであり、聖地としての日向（その中心が務志賀）にキリシタンが流れる事態すら想定される。そうなれば、キリスト教嫌いの親賢にとって好ましいことこの上ない。このように、宗麟と親賢の思惑はまったく異なるものの、キリスト教的理想国建国は双方に利があるとみなすことができるのである。

（35）「永禄四年十月六日付宇佐宮寺神官社僧連署申状案幷宇佐宮社家一同目安状案」。引用は『大分県史料』24（大分県史料刊行会）による。

（36）大友氏と宇佐宮の相克については、以下の文献を参照。清原貞雄「大友宗麟の社寺破却政策に就て」（『大分県地方史』十三―十六、一九五八年）、芝崎正則「大友宗麟の寺社政策・寺社破却について」（『大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究紀要』10、一九九七年）、永田忠靖「中世後期における豊前一宮宇佐宮の動向」（『国立歴史民俗博物館研究報告』一四八、二〇〇八年）。

（37）『歴代鎮西要略』七。引用は『宇佐神宮史史料編』十三（宇佐神宮庁）による。

（38）『両豊記』「宇佐宮回禄之事」。引用は同右書による。なお、この時社殿が焼失したという確証はない。天正九年十一月に同じく田原親賢に攻められ宇佐宮が焼き討ちされているので、あるいはその内容が紛れ込んだのかもしれない。いずれにせよ、ここでは聖なる存在に相対した者の心的葛藤を注視したい。

（39）前掲註（33）拙著参照。

（40）日向ではキリスト教的理想国建国のため、一部の寺院は破壊されて材木が教会建設のための資材として再利用された。その際、破壊の対象とされた寺院の僧たちを使役し、作業にあたらせていた。「とりわけ彼ら（筆者註：仏僧たち）を悲しませたのは、かの地で神を敬い、仏を拝み、仏僧たちに寄せられていた権威や尊崇の念を保持することは似つかわしくないとして、彼ら自身の手で仏像や寺院を破壊し、それらの材木を、今や建立され始めたキリシタンの教会の建物に使用するため運搬せねばならなかったことである。（中略）仏僧たちは修道士の命令によって、心の中で悲哀と苦痛を感じつつも、一生懸命に破壊作業に従事した」とある（『日本史』第二部五章）。実際問題として、少人数の修道士だけで現場を監督することは困難であろう。そのため、臼杵でキリシタンになった仏僧が修道士の手助けをするなど（『日本史』同前）、宗麟とともに務志賀にやってきた複数の人間が、修道士をサポートしていた。彼らの多くはキリシタンであった可能性が高いが、後述するようにキリシタンになった者でも、在来宗教の影響から抜けきれない者もいた。そう考えると、現地の仏僧たちを破壊活動に従事させたことは、彼らと神仏の縁を断ち切らせたり、労働力確保という目的のみならず、自らの手を汚さずに済む方法でもあったという見方ができよう。

（41）「一六〇九、一六一〇年度年報」。引用は『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅱ期第1巻（同朋舎出版）による。この一件については、江戸時代に貝原益軒が記した『筑前国続諸社縁起』にほぼ同様の話が載せられている。

（42）五野井隆史氏は、宗麟が天正十二年から翌年にかけて、家臣団や領民に対する強引な改宗運動に乗り出したことを指摘する。その上で、「日向国において実現できなかったキリシタンの町を豊後領内に作る意向を示したかのようである」と評価している。五野井隆史「大友宗麟の改宗と豊後教界」（同『日本キリシタン史の研究』吉川弘文館、二〇〇二年）。

（43）天正六年から九年の間に限っても、豊後国内の宗教施設・祭礼に対する否定

的な行動が確認される。①それまで参加していた府内祇園会や、豊後国一宮柞原八幡宮の祭礼への不参加（一五七八年十月十六日付フロイス書簡」・『日本史』第二部四章）、②柞原八幡宮の宝物を売却（『木砕之注文』）、③万寿寺を焼き討ちして寺領を家臣に配分する（『木砕之注文』・「一五八五年八月二十日付フロイス書簡」など）。

　これらすべてをキリスト教との関連で理解することについては、異論もあろう。しかし、いずれも改宗後数年のうちに見られた変節である。たとえば、③については「是と申ニたいおそ（ダイウス）と申しゆ門（宗門）出来候て、御引節めされ候御屋形様きりしたんと申しゆ（宗）ニ御なり候間、寺仏御くるしめされ候」という記述が『木砕之注文』に出ている（引用は『木砕之注文』、中央公論美術出版による）。以上から、いずれもキリスト教との関連で理解して大過ないと思われる。

　大友氏とこれらの寺社との関係については、大友館研究会編『大友館と府内の研究』（東京堂出版、二〇一七年）に詳しい。

（44）前掲註（5）渡辺論文参照。渡辺氏はこうした津久見における宗麟の活動を、日向で目指した理想国のミニ版の創出と評価している。従うべきであろう。

（45）『日本史』第二部八章。

（46）「一五八九年度年報」。引用は『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅰ期第１巻（同朋舎出版）による。

（47）比較宗教の観点から、一神教であるキリスト教と、中世日本で展開した仏教の一派との共通点が指摘されている。たとえば川村信三氏は、信仰対象を「唯一」の対象に限定した真宗本願寺派（一向宗）や法華宗を「主神崇拝」的宗教として、キリスト教との類似性を主張する。川村信三『戦国宗教社会＝思想史』（知泉書館、二〇一一年）。原則論としては重要であるが、実際にこれを信仰した人々の実態とズレが生じることがあり得た点には注意を要する。

一口にキリシタンといっても、在来宗教との兼宗的態度をとった人々（融和的キリシタン）がいたわけである。

　もっとも、排他的キリシタン・融和的キリシタンという区分けはあくまで便宜的なものである。一人の人間の信仰態度が変化することが往々にしてあり得たことは、リンセイの妻や有馬領の老人の例からも明らかである。従って、固定的な属性というよりも、ある時点における信仰態度を探るための分析指標として措定したものとご了解願いたい。

（48）中野等「黒田孝高」（前掲註（6）五野井著書所収）。

（49）日向のキリスト教的理想国については、宗麟終焉の地である津久見の事例はもとより、同様の宗教的事象との比較検討を通じて議論を進めることも重要であろう。そのひとつとして、長崎が挙げられる。日向出兵から二年後の天正八年、大村純忠は長崎をイエズス会に寄進している。寄進に至った事情など議論のわかれるところであるが、同地の有力寺院である神宮寺は焼かれ、キリシタン以外の入市を禁じるなど、宗教色濃厚なコミューンが出現したことはたしかである。当該期の長崎については、安野眞幸『バテレン追放令』（日本エディタースクール出版部、一九八九年）、同『教会領長崎』（講談社選書メチエ、二〇一四年）などを参照。

〔付記〕

本稿校正中の令和五年九月十七日、別府大学名誉教授の田村憲美先生が、不慮の交通事故に巻き込まれ、急逝されました。

これまでいただいた学恩に深謝しつつ、田村先生の御霊前に本稿を捧げます。

合掌